都中英研だより

第 60 号

東京都中学校英語教育研究会
会　長　井 田 宗 宏
（東大和市立第二中学校長）

関ブロ東京大会
（第34回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会　東京大会）
成功のうちに幕を閉じる

去る11月12日（金）、足立区内にある『ギャラクシティ西新井文化ホール』及び『足立区教育相談センター』を会場として、第34回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会東京大会が開催されました。事務局の集計では、488名の参加者を数えるほど盛況でした。

午前中に開かれました全体会では、大会会長・ご来賓からの挨拶に続いて、大会主題「English Education 2010 英語教育の変革期を創る」の提案がありました。その後、足立区立第十中学校１年生による公開授業（授業者：同校教諭　渓内 明先生）がありました。リプロダクションに重点を置いた学習指導は、授業改善をする上での示唆に富む実践でした。その授業内容にも増して多くの参観者の関心を集めたのは、生徒たちの反応でした。彼ら彼女たちが懸命に授業に取り組む姿勢は感動的でした。午前中の最後に、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官の平木裕先生による記念講演がありました。平成24年度から全面実施される新学習指導要領を見据えて、私たち英語科教員がとらえておくべき視点を得ることができました。

午後には、五つの分科会がありました。第１分科会では、「SHOW ＆ TELLの継続的な指導」と「Negotiation的要素を取り入れたコミュニケーション活動」について紹介がありました。第２分科会では、「文法事項の定着を図るためのコミュニケーション活動」と「文法事項を用いた発展的なコミュニケーション活動」についての発表がありました。第３分科会では、「話の内容や書き手の考え方をとらえる英語の読み方の指導の工夫」と「モチベーショナル・ストラテジー実践記」について報告がありました。第４分科会は、入門期及びその後における「語彙指導のあり方と辞書を活用した語彙指導」についての実践報告でした。そして、第５分科会では、「密接な連携」を目指してきた足立区立小中学校のこれまでの経緯を発表し、これから小中連携のためにはどうしていけばよいかを参加者と協議しました。

今回の各分科会提案者は、いずれも若手の精鋭を集めました。各分科会にてご指導・ご助言をいただきました吉田 研作先生（上智大）、根岸 雅史先生（東京外国語大）、高橋　貞雄先生（玉川大）、望月正道先生（麗澤大）、木村　松雄先生（青山学院大）の皆様からの心温まるご支援をいただき、東京都を代表するにふさわしい提案内容となりました。どの分科会でも積極的な質疑応答や意見交換があり、こちらも盛況でした。この日の最後に各分科会会場で、各県代表者からの閉会の辞をもって、本会は終了しました。参観者の皆様のすがすがしい顔が本会の成功を物語っているかのようでした。

「板橋区の研究活動の現況」

ー小中連携を具体的に推進する方策案等の提示ー

板橋区立西台中学校長　阿字宏康

平成21年度に小学校教育会の一部会長との具体的な研修を含む接続について検討した。この中で試行として、小学校の英語活動と中学校英語科が共に実践を研究する研究員制度を試行として立ち上げた。

一方、同年度に板橋区教委は、板橋区教育課程専門会議教科等専門部会を立ち上げ、その中で外国語活動（英語活動）・外国語（英語）部会が設定された。

研究授業等を実施し、数回の協議を行い、係る課題についてその整理や提言等を次のようにとりまとめ、今後は具体的に展開すべく順序よく実行に移す。

1　英語活動・英語科における小学校・中学校連携の意義

①　具体的な活動を通して、児童・生徒の発達の連続性を踏まえ、義務教育における小学校から中学校への円滑な接続を図ることができる。

※横断的な対応から縦断的に対応

②　学習指導要領に示される活動等について、具体的な展開を目指す中で小学校と中学校の具体的な連携を図る。

※特に学習意欲を高めることを中心に

2　英語活動・英語科における小学校・中学校連携の要点

※特に６年間で英語の指導の在り方をとらえることが小学校では必要

①　英語活動については、指導形態は学級担任とALT（英語学習指導補助員）、学級担任が行う複数の学級担任が行うなどがある。週35時間での実施を踏まえ学級担任等が行う活動を具体的に展開できるようにする。

※ALTはaudio　playerではない、中学校でも同様である

※TTであることと、主たる指導はHRT（学級担任）であることを常に踏まえる

②　小学校の英語活動については、かつての生涯学習のキャッチコピーである「いつでも、どこでも、誰でも」を意識する。

※学校の実態、子供の実態に応じて指導を行う中で指導法の改善を目指す

③　かつての研究開発学校の成果等から、小学校から中学校への接続においては「英語嫌い」をつくらない配慮が必要である。

※英語を覚えることから慣れることが重要

④　中学校での英語の入門期における活動が小学校において特に参考になると考える。

⑤　「英語」使用についての抵抗感を指導者自身がもたない工夫が必要である。

⑥　文部科学省が示した「英語が話せる日本人育成」について適切に理解する。他校種の教員がどのように具体的に活動や授業を展開するかを適切に理解する。

※特に小学校では英語活動を始める経緯を適切に理解する

3　実践例

①　部会として研究授業等を２回実施し、活動の在り方を検討した。

②　小学校の英語活動に何を中学校英語科教員が求めるかを含め、諸活動に係る課題を整理した。

③　過去の資料等を整理する作業を進めた。

④　小学校の英語活動指導及び中学校の英語指導に係る現状と課題の検討に着手した。

⑤　中学校の英語指導に関して、基本的な考え方や具体的な指導技術等の検討に着手した。

⑥　研修の在り方について検討した。

ア　教育会や区中研の組織の中で小学校教員と中学校教員との合同研修、ALTを含む研修を夏季休業日に行う案を検討した。

イ　より効果的な研修についての目的・方法・内容等を考案した。講義、演習、協議を盛り込むことを含む。

⑦　今後、教育会と区中研との具体的な実践研究を推進する位置付けとしたい。

※研究員制度等、一過性でなく、一人ではなく、集団で授業に係る指導技術を含む教員の指導力向上を図る教育研究員等の制度・組織を立ち上げていきたい

※このためには、例えば城西ブロックでまとまって夏季の集中研修を行うなど実行可能なことから手がける必要がある

4　「活動」に係る配慮事項・今後の方策等（案を含む）

①　教材教具の開発とその共有化

※かつての多摩教育研究所における教材キットやカフェテリア研修等の導入

※作成した教材等はオープンにすること、あるものを活用することから始め、改善・工夫を通して教材とその提示はより充実する

②　学習指導要領等に示されることの理解の促進

＜例＞

小学校外国語活動…コミュニケーションの素地を養う。

中学校外国語……コミュニケーションの基礎を養う。

高等学校外国語……コミュニケーション能力を養う。

※どの段階が、どこまで実践するかが課題

※接続に関して、各校種で何を学んでいるか、その目標は何かなどを適宜理解する

※別の観点では、例えば小中高大で接する英語の授業時数は人の一生で何時間かということを時に思い巡らすことも重要である

③　小学校において

※週１時間での「定着」→定着を焦らないことが肝心

ア　かつての「国際理解教育」年間指導計画等他教科との関連を図る。

※英語指導に特化することの限界もあったか

考え方　・自国の伝統文化の尊重
　　・アイデンティティの確立
　　・異なるものの尊重

※人・考え方・文化を受け入れること

イ　活動（学習）意欲を高めることの配慮する。

ウ　授業の流れの工夫　ゲーム、歌、チャンツ、読み聞かせ

※リズムを大切に

エ　系統性の検討

オ　学級担任一人で行う授業を目指す。

カ　ALTの活用

※何を、何のために、どのように、どこまで、どの程度かかわるかを明確に

④　中学校において

※英語の学力モデルのとりまとめ

ア　言語活動の整理と実践

※話すこと、聞くこと、読むこと、書くことのバランスのとれた内容等、言語使用場面を具体的に想定する

イ　学習者主体の授業

ウ　豊富な活動の展開

エ　学習者のつまずきとその変容の看取り

※忘れがちなことの改善状況を看取る

※portfolio（個々の生徒の学習歴の把握）

※「意欲的に取り組むようになった」から何が課題なのかを記録する

オ　ALTの活用

⑤　小学校・中学校共通

※課題の列挙とその整理が重要、まずはこれを手がける

※いつまでに、何を、どのように、どの程度行うかを検討する

ア　努力目標ではなく行動目標を明確にする。

※行動計画

イ　教室英語（Classroom English）の多用

※小学校では特に日本語との併用

ウ　英語を用いる活動を豊富にする。

エ　学習者の意欲を高める。

※学習者を十分に観察する

オ　児童・生徒の興味・関心等を十分に踏まえる。

カ　模範となる授業・活動を参考とする。

※⑤のアに関連

キ　相互に授業の在り方を検討・理解する

※英語ノートとそのＣＤ、中学校の教科書等とその構成

※小中への配付も必要

⑥　目指す児童・生徒像を具体的に明らかにする。（授業レベルや学校レベル）

※最も大切なことは、具体的な授業レベルで例えば「中学三年生になったら、〇〇〇のような活動が定着している」という明確な像をもっていること

⑦　特に中学校においては目標に準拠した評価に努める。

※具体的な目標をもつことで具体的に授業を評価・改善できる

都中英研　本年度上半期に行った各研修会

平成22年度８月末までに、都中英研では、以下の通り、各種研修会を開催しました。

＜研究部＞

研究部では、恒例の「語いワークショップ」を夏季休業中に３回開きました。今年度は、Picture Describingに言及する研究報告でした。第１回目は、７月26日(月)に、港区立赤坂中学校で行い、49名の参加者がありました。第２回目は、８月４日(水)に、品川区立日野学園で行い、46名の参加者がありました。そして、第３回目は、８月19日(木)に、江東区立第三砂町中学校で行い、44名の参加者を得ました。３回の合計参加者数は、139名を数え、今年度も盛況の研修会となりました。

＜事業部＞

事業部では、「サマーワークショップ」を８月20日(金)に、千代田区立九段中等教育学校で行いました。この研修会にも49名の参加者がありました。参加者からは、実践的で有意義なワークショップが体験できたとの声も聞かれました。

＜各地区部長・幹事会＞

都内各区市で構成する地区教育研究会の英語部は、58あります。その部長もしくは幹事が一堂に会する研修会が、８月23日(月)に、豊島区立駒込中学校で行われました。今年は、麗澤大学教授の望月正道先生を講師に迎え、「新学習指導要領全面実施に向けて」という講演を行いました。望月先生のご丁寧な解説により、新学習指導要領への理解が深まりました。

ー・ー出版部からのお知らせー・ー

中英研出版部では、１学期に「都中英研だより」(だより春号)と２学期に「都中英研だより」(だより秋号)を、年度末に「中英研会報」(会報)を、それぞれ発行しています。

だより春号は、会長所感・都中英研の活動予定・役員紹介・等を掲載し、１年間の主な事業計画をお知らせしています。一方、だより秋号は、年度上半期に行った、主な研修等の様子を紹介しています。なお、この４年間は、都の東西南北より、毎年一つの地区をクローズアップして情報をいただき、それぞれの地域の英語教育に関わる研修活動の特色を紹介してまいりました。

そして、１年間を締めくくる会報では、その年度に行われた中英研の全ての事業を報告すると共に、各地区の１年間の研究活動の記録をまとめて報告しています。特に、この地区活動報告は、ここ数年、都内全市区ばかりか西多摩地区や島しょからも原稿を頂戴しており、東京都の各地区の研究活動の様子を知ることができております。執筆を頂いております各地区の部長ならびに幹事の皆様には、この場をお借りして御礼申し上げます。

これら３種類の出版物につきましては、現在、各校２部ずつの配布をさせていただいております。予算の都合上、全会員の皆様にお届けできずに申し訳ございませんが、これに対応するよう、『中英研ホームページ』にて閲覧できるようにしております。こちらもご覧いただければ幸いです。

今後とも、都中英研の活動に対して、ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

＜中英研ホームページ＞

http://www.chueiken-tokyo.org

＜出版部への問い合わせ先＞

連絡先：西東京市立田無第四中学校　　副校長　池田　武男（中英研出版部長）
TEL: 042-465-6113　FAX: 042-469-2181　Mail: j-tanas4@nishitokyo.ed.jp